# 元学生記者は「お寺の和尚さん」

## 学生記者OB 4年ぶり再会して “開眼”の旅

元「Hakumon ちゅうおう」学生記者
**倉田政美**（2001年、法学部卒）

新入生の皆さん、中央大学ご入学こめでとうございます。

きょうは、OB再会の話――。

大学時代の友人は貴重ですね。私は中大を卒業してから五年の歳月が流れました。学生記者仲間の付き合いは今も続いています。

中大の卒業生はあらゆる分野に活躍しています。なにも法曹界や公務員ばかりではありません。皆さん、こんな先輩もいるのです。スバリ、「お坊さん」です。

### 大谷秀之君、晴れて僧名「宥秀」

久しぶりに学生記者OBの合宿をやりましょう。昨年夏、突然の電話だった。明るい声の主は大谷秀之君、28歳。2002年に法学部を卒業した学生記者の仲間だ。学生時代の彼は、礼儀正しさに加えて愛嬌のある、まさにリーダー的存在だった。

実家は長野県松本市のお寺さん。が、彼はすぐに寺を継がなかった。2年間は都内で出版社の飯を食い、商品を買ってもらうために頭を下げる仕事にチャレンジした。「学生気分はいっぺんに吹っ飛んでしまった」という話をよく聞かされた。

次第に責任ある仕事を任される立場になっていった。しかし、いずれは家を継ぐことになる。「このままでは会社に迷惑をかけてしまう」……彼が最初に悩んだのは、このときだった。2年後の3月、ついに会社を辞めた。

ところが実家に戻った彼には、さらなる試練が待ち受けていた。僧侶になるためには1年間、京都市東山区にある智積院の智山専修学院で修行しなければならない。学校だから新学期はやはり4月。彼はさっそく京都に旅立った。

友人にも連絡する間もない。いったん入学すると、「年に一度しか実家へは帰れない。友人が電話をしても繋いでもらえない」という厳しさ。私は、この間に一度、彼から電話をもらったが、のんびり話ができなかったことを覚えている。

昨年3月、晴れて修行を修め実家に戻った。僧名は「宥秀」。今度は4百軒以上もある檀家へ住職の父と挨拶回りだが、これも日常の仏事をこなしながらだから、フル回転の毎日だった。私には想像し難い環境だけに、修行の1年に続く〝実地〟は、さぞ大変だったと思う。

### 松本市の古刹「金峯山牛伏寺」にて

松本市の「金峯山牛伏寺（ごふくじ）」――。厄除けとして有名で、重要文化財を数多く蔵するこの真言宗の古刹が、彼の実家だ。私は学生時代にここを2度訪れている。5万坪の広大な境内からは松本平が眼下に広がり、真正面には北アルプスの山なみが幾重にも重なる。街の喧騒から遠く離れたこの地に立つ、寺のたたずまいが好きである。また、国の重文を含めて、30以上の仏像も所有している。

「また牛伏寺に来た」と思うだけで、なぜか私の心は和む。

――昨年10月29日。その日がやってきた。私は一人で夕方の松本駅に着いた。遙か眼下の松本盆地は、まるで蛍が飛び交うように美しかった。仕事の都合でほかの仲間とは別々だったので、後から来る後続部隊を待つことにした。10月だが、ひどく寒く感ずる。

ふすまが開くと、破顔一笑の彼が現れた。私は即座に「おぉ、やっぱり坊主頭だ」と叫んでしまった。間もなく賑やかな声が近づいてきた。

堂々たる風格。大谷宥秀和尚の読経をうしろで聴き入る一同

話は次第に大谷君の話に。もちろん、ケイタイもインターネットもない時代とはほど遠い世界の話。しかも、規律が厳しい集団生活の話。気持ちははやる。

「だからこそ、辛い時代（京都の修行）をともに乗り越えた仲間の存在は、何よりも大切だった」と彼が話し始めると、一同シーンとなる。「これを見てください」と、彼は大きな紙袋を持ってきた。中には手紙がぎっしり詰まっている。修行中に友人、家族、そして恩師から届いた激励文である。

「仲間とのこの手紙は一生の宝物です」と言いながら、一通を取り出して読み始めた。

それは私の手紙だった。「やめてくれ！」と大声を上げたが、彼が楽しそうに読み上げているのを見ているうち、私までうれしくなってきた。

話は尽きず、終始上機嫌だった彼が突然、こんなことをいった。

「明朝、勤行（ごんぎょう）をやります」

つまり、僧が仏前で読経や回向（えこう）をするお勤めである。

## 朗々たる読経の声、木魚の音

7時過ぎ、棟続きの如意輪堂で五人の学友が待ち受けていると、木蘭色の袈裟に身を包んだ彼が現れた。その姿に私たちは一瞬、ハッとした。彼は照れ笑いを浮かべつつも、真剣な顔つきで準備をしている。

そして、おもむろに正座をした彼は、短い沈黙の後、朗々とした声で般若心経を唱え始めた。私は「おぉ」と小さく声を上げ、「すごい！」と思った。

彼は学生時代から裏表のない性格の男だったが、1年間修行を積んだだけで、これほどの変化があるとは……。変化といえば唯一、坊主頭になったことぐらいに考えていた私は恥ずかしかった。いま、目の前にいる彼は、学生時代の彼ではなかった。厳しい修行によって培われた発声や所作、つまり、「勤行」こそが彼の変化を物語る証であった。

およそ15分間、私たちは寒さを忘れて正座をし、彼の読経を聞き入るばかりだった。ゆっくりと境内を木魚の音が流れる。彼の後ろ姿と、奥に鎮座する仏像や仏具とが一体となっているように見えた。皆が圧倒されてしまった。

「聖」「俗」相和して―。中央・大谷、左・筆者

「勤行が僧侶としての気持ちをつくったのです」。昨夜の笑顔ではなく、精悍な顔つきで彼はいった。これほどのものを見せられてしまい、「私たちに人前に出せるような成長の証が果たしてあるだろうか」と、思わず互いに顔を見合わせた。

今回の〝合宿〟はさしずめ、新生・大谷宥秀のお披露目会だった。「よし、次は私が主役になってやる。その時は彼以上の成長わ仲間に見てもらおう」と、堅く心に誓った。

× ×

さて、新入生の皆さん、いかがでしたか。友人の成長を見てしまうと、自分と比較して、少し不安な気持ちに駆られます。しかし、それを糧に奮起することもできるのではないでしょうか。切磋琢磨する友人は、何より大切な存在です。すばらしい友人と出会ってください。

その後ろから船橋智君、木瀬恵子さん、そして最後に私たちを指導し、現在も親交が続いている、御年六十七歳の大先輩・石橋武之氏が入ってきた。

思わず「みんな変わっていないなぁ」と第一声。

## 総勢6人に「明朝は勤行」

さっそく鍋を囲み、近況を語り合った。仕事をやりくりして皆、よく集まった。わざわざ九州から飛行機で駆けつけてくれた人もいた。